

三景艦物語

A STORY OF MATSUSHIMA CLASS PROTECTED CRUISERS by Tsutomu Nakagawa



中川 務

単横陣で航走する三景艦。手前から巖島、橋立、松島の順。(要約要文之会刊「明治百年記念アルバム」より)

誕生の背景

明治時代の日本軍艦を眺める時、誰の目にも異様に映る一群の艦がある。それは巖島、松島、橋立の3艦で、日本三景の名を冠したことから別名を三景艦と呼ばれている。三景艦は4,200トン強の船体に32センチの巨砲を1門だけ搭載し、松島にいたってはこれを後部に配置して艦首方向に主砲を指向できないという常識外れた方法を採用していた。これら3隻は、わが海軍では無論のこと、世界の軍艦史上でも、もっとも風変わりで奇妙なタイプに属することは間違いなく、その建造と運用の過程を振り返ってみることも無意味ではないと考える。

三景艦は明治初期の日清両国の対立が生み出したものであり、特に清国北洋水師の主力艦定遠、鎮遠に対抗するためだったことは、今日広く知られている。それでは何故30.5センチ砲を搭載する甲鉄砲塔艦に対して、三景艦のように型破りの軍艦が建造されたのだろうか。

わが海軍が日清戦争を予期して本格的な軍備拡充に着手した明治16年頃の日本は、松方財政と呼ばれるデフレ政策によって西南戦争以来の悪性インフレが終息したものの、深刻な不況下にあった。当時の国家予算約7,000万円のうち、30パーセントに近い約2,000万円が軍事費に振り向けられ財政は限界状態にあった。このなかで海軍は建艦予算333万円/年を獲得したが、明治18年2月、フランスに発注しようとした8,800トン型装甲艦の見積り価格が387万円(回航費用を含む)だったことから分かるように装甲艦1隻の建造費用にも満たない状態だった。定遠型に対抗できる艦の獲得を熱望するが、どうしても財源が足りない。この時に登場したのが、フランスの高名な造船家エミール・ベルタン(以下ベルタンと略記)の設計案だった。

海軍の招聘に応じてベルタンが来日したのは明治19年2月だが、翌3月には早くも第1期軍備拡張計画が決定し、そのなかに4,000トン型(建造中に艦型を4,278ト

ンに増大した)海防艦4隻が含まれていた。この迅速さから見て、同氏の在任中、日本海軍との間に周到な次期軍備計画の検討が行なわれていたと思われる。財政上の制約から、ベルタンが提示した建艦計画の即時実施は不可能だったが、一艦当たり約250万円^{*1}で定遠型を圧倒する強力な軍艦が建造可能なプランは非常に魅力あるもので、新たに募集した海軍公債による財源749万円を裏付けとして、うち3隻が着手された。三景艦は財政難に喘ぐ日本海軍の苦渋とベルタンの造船技術の結合によって実現した軍艦だったのである。

三景艦の構造

三景艦の最大の特長は厚さ355ミリに達する定遠型の装甲を貫徹するために32センチの巨砲を1門だけ搭載した点にある。最初の計画では700メートル/秒以上の高初速をえるため、砲身長を42口径にする考えだったが、これでは旋回時に船体が傾斜するというベルタンの助言により38口径に短縮して初速を若干減少し、これを露砲塔に搭載した。この砲の諸元は定遠型の30.5センチ砲に比べて初速、砲弾重量、貫徹力ともはるかに勝り(右下の表参照)、搭載数を極限しても相手艦を凌駕する有力な砲を搭載するというベルタンの設計方針を明確に示している。当時の大口徑艦砲は前装式から後装式への進歩に伴って、一時見られた砲の口径を縮小して砲身長の延長により初速を増大して貫徹力を増す傾向が一段落して、再び口径の増大に転じつつあったが、三景艦の搭載砲は、この趨勢のトップを行く高初速の大口徑砲であった。

また副砲は当初、発射速度50秒〜1分/発のカネー式12センチ砲の搭載を予定して着工したが、中口径速射砲の著しい発達を考慮して、建造中に発射速度6秒/発のアーミング式12センチ速射砲に換装した。この処置は結果的に大成功で黄海海戦の勝利の主因になったけれども、弾薬庫から下甲板に至る弾薬送昇機が1基に過ぎず、しかも人力式(橋立のみ蒸気駆動)だった。弾薬の供給システムが砲の発射速度増大に追いついていなかったのが、本艦型を含む当時の中口径速射砲の搭載艦に共通する弱点だったようである。

三景艦は定遠型に対して戦術上優位な位置を占めるため、初期計画では主機に三段膨張式レシプロ蒸気機関、主缶に圧力12kg/cm²の低圧缶を搭載し、強制通風方式^{*2}によって5,400馬力で16ノットの速力発揮を意図したが、高圧缶の採用に伴い、炉筒の圧壊と缶管からの缶水の漏洩を誘発しやすく運用上、大きな障害になった。船用缶の流れから見て本艦型の主缶は円缶の発達のパークに位置し、高圧缶の主流が水管缶に移行する直前の存在だったといえよう。

優れた攻撃力および運動力と並んで防御面でも三景艦

三景艦要目表(日清戦争開戦時の艦島を示す)

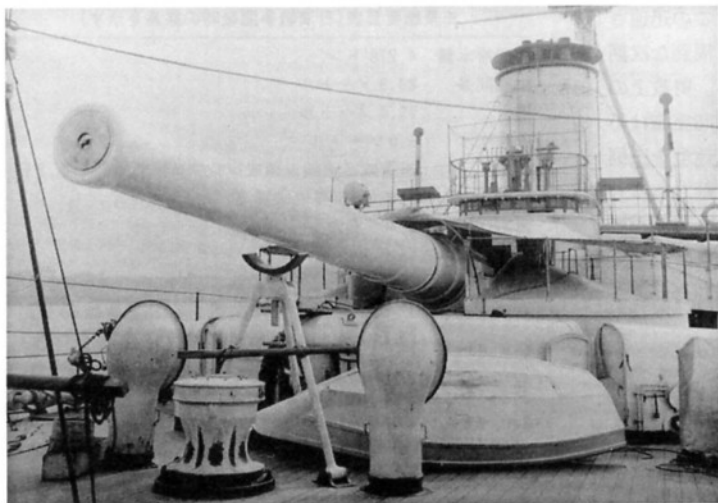
常備排水量	4,278 トン
垂線間長	89.9 メートル
幅	15.4 メートル
平均吃水	6.0 メートル
主機	横置式3汽筒三連成レシプロ蒸気機関2基、2軸
主缶	円缶(石炭専焼式)6基
出力(計画)	5,400 馬力
速力(計画)	16.0 ノット
燃料搭載量	石炭 670 トン
兵装*	32 センチ 38 口径単装砲1基(搭載弾数60発)、 12 センチ 40 口径単装速射砲11基(搭載弾数1,760発)、 47 ミリ単装重速射砲6基(搭載弾数約2,300発)、 47 ミリ単装軽速射砲6基(搭載弾数約4,400発)、 1 インチ 4 連装ノルデンフェルト式機砲2基(搭載弾数5,000発)、 36 センチ発射管4門(搭載魚雷数10本)
装甲	甲板30~40 ミリ、露砲塔300 ミリ、司令塔100 ミリ
乗員	360 名

*松島、橋立の兵装のうち、次の点が艦島と異なる。松島:12センチ40口径単装速射砲12基、47ミリ単装重速射砲5基、47ミリ単装軽速射砲10基、11ミリ5連装ノルデンフェルト式機砲1基。橋立:47ミリ単装軽速射砲12基、11ミリ5連装ノルデンフェルト式機砲1基。

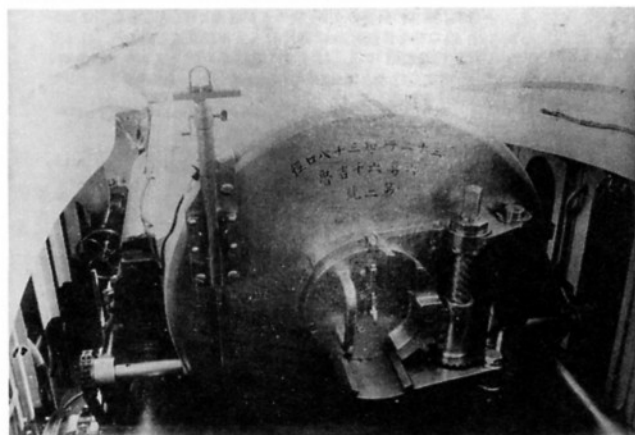
は独特の方式を持っていた。当時の装甲艦の防御は、ほぼ水平の弾道で飛来する弾丸を正面から受け止める垂直防御方式だったため、砲撃威力が増大すると必然的に装甲の厚さを増し、艦型の大型化と建造コストの高騰を招いた。これに対してベルタンが採用したのは吃水線下1.75メートルの部分に接し、艦の中央部で97センチ盛り上がった厚さ30~40ミリの亀甲型の防御甲板である。この傾斜した装甲板によって命中弾が斜めの状態(斜撃)になるため、比較的薄い防御板でも所要の耐弾力を与えることができる。弾火薬庫、機関などの重要部を防御甲板の下方に配置し、上方の被弾に対しては舷側に石炭庫を置いて石炭による防弾を図った上、内部に多数の防水区画を設けて浸水を局部で食い止めるとともに、水線部に椰子実皮の粉末を充填した防水筐と呼ぶ水密区画を設置して浮力とする。これはイギリスのエルジック型巡洋艦

三景艦と定遠型の主砲諸元比較表

	三景艦	定遠型
砲口径	32 cm	30.5 cm
砲身長	38 口径	25 口径
重量	66 トン	32 トン
初速(鋼鉄弾)	650 m/秒	500 m/秒
砲口エネルギー	9,690 mt	4,189 mt
砲弾重量(鋼鉄弾)	450 kg	329 kg
貫徹力(鍛鉄板)		
砲口	1,012 mm	562 mm
1,000 m	907 mm	494 mm
2,000 m	823 mm	433 mm



30.5センチ砲を搭載する清国の定遠型に対抗して、三景艦は32センチの巨砲を露砲塔形式で艦首（橋立、厳島）または艦尾（松島）に1門だけ搭載した。写真は橋立の艦首砲。



32センチ砲の砲尾クローズアップ。写真は松島のもので、この砲は定遠型の30.5センチ砲に比べて、初速、砲弾重量、貫徹力の点ではるかに優れていた。

と同じ発想であり、装甲重量を軽減し三景艦を安価な軍艦とするのに決定的な効果を及ぼした。

この反面、本艦型は定遠型との対戦を予想して露砲塔の周囲に300ミリ、主砲の弾薬通筒に250ミリ、司令塔に100ミリの重厚な防御を施していた。三景艦は、今日一般的に考えられるような軽防御艦ではなく、戦列艦としての使用に耐える新しい防御方式を持つ主力艦であったことを明記する必要がある。

三景艦の設計に関してもっとも興味を引くのは、厳島と橋立が主砲を前部に搭載したのに対して、松島がこれを後部に搭載したことである。この点について、その後の建艦計画の推移を検討すると、明治19年3月の時点で4隻を建造する予定だった4,000トン型海防艦が、翌20年初めまでに3隻に減少しているが、明治21年2月、閣議に提出された第2期海軍拡張案では新しく4,000トン

内外の海防艦5隻の整備を最終目標とし、財源の関係上、即時実施が不可能としても、うち1隻(6,563トンに艦型を増大)を遅くとも明治27年までに建造したいと述べている。この経過から、予算の都合上、着工を繰り延べた1隻を早急に建造し、可能ならばさらに4隻を追加して海防艦2隊を整備しようとする海軍の意図が読み取れる。すなわち、三景艦は2個小隊で1隊を編成し、1個小隊(2隻)で定遠型1隻に対抗することを前提とした。どの態勢からも射撃が可能なよう前部砲塔艦と後部砲塔艦を組み合わせる予定だったが、その後の建艦政策がイギリス式の高速巡洋艦に移行したため、最初の3隻が竣工しただけで建造が中止されたのだと推定する。したがって、未成に終わった第4隻目の艦は後部砲塔艦として計画された可能性が強いのである。

三景艦の建造と回航

三景艦のうち、厳島は明治20年2月2日、松島は同年8月10日、フランスの地中海造船所に発注され、残る橋立は同年10月10日、横須賀造船所に建造が訓令されたが、これについてベルタンは横須賀造船所の製図能力の乏しさを理由に欧州で艦型の異なる厳島と松島を建造し、内地でその図面を流用した橋立を建造すれば、工期を短縮でき、コストの比較も可能だと提言している^{*3}。多分ベルタンは状況が許すならば、松島の同型艦を橋立進水後の横須賀造船所の船台で建造する意向だったのではあるまいか。

1番艦厳島は2番艦松島より若干先行して明治21年1月7日に起工され、明治22年7月18日に進水後、明治23年中期、艤装中に前述のとおり副砲をアームストロング式速射砲に改正している。本艦に搭載するカネー式32センチ砲の1番砲は明治24年4月下旬、オックの射撃場で20発の試射を行なったが、本砲の契約条件は700メートル/秒(±10メートル)の初速達成の成否により33,000フラン(邦貨換算13,000円)の賞金または罰金を課する過酷なものだった。結局、この砲は初速703メートル/秒の成績で、砲身、砲架ともに異常なく領収されたが、前例のない新型砲を試製せず、即時実用砲として搭載したのは異常というべきであろう。この頃、世界のトップレベルの高圧缶として製造された6基の低圧缶も18 kg/cm²の水圧試験を無事通過し、数回の公試運転にも接合部から漏洩を認めなかった。このようにして明

治24年9月3日に竣工した厳島は、11月12日ツーロンを出港し内地に向かった。

ところが、地中海航行中に早くも火炉の管板と管（燃焼ガスを通すため煙管と称した）の接合部などから缶水の漏洩が始まり、多大の不安を持ってインド洋を航海中、全缶が次々と漏洩して危うく漂流するという惨状を呈し、翌25年1月8日コロンボに緊急入港した。この時、本艦に乗艦していたフランス側の保証機関士もなす術がなかったばかりか、コロンボ入港後の検査で管板の孔径が煙管より2〜3ミリ太く、無理に圧着していることが判明、造船所側にクレームを提起し、同地でその対策に100日間を空費したため、厳島の品川到着は明治25年5月21日になってしまった。

明治21年2月17日に起工、明治23年1月22日に進水した2番艦松島は、厳島のトラブルを参考にして煙管の末端にカラマン式の漏洩防止処置^{※4}を講じた上、明治25年4月5日に領収後、約3カ月間入念な整備と慣熟運転を行なった上、7月23日にツーロンを出港し、10月19日無事佐世保に到着した。この後も、松島の汽缶は良好な状態を保ち、全力発揮が可能だったのに対し、厳島の汽缶は日清戦争まで回復せず、対清戦備に深刻な影響を与えた。

3番艦橋立は明治21年8月6日に起工されたが、艦材の入荷の遅れ、本艦に搭載すべき12センチ速射砲を積載した英船トリニグトンの遭難などによって工程が著しく遅延し、明治24年3月24日に進水した。本艦の建造に当たって、もっとも問題になったのは重量66トンに達する32センチ砲身の積載で、内地に適当な能力を持つ起重機がないため、一時本艦をフランスに回航するよう決定したが、明治26年12月特急工事中の呉造船部の100トン起重機が完成したので、砲身を内地に輸送し呉で搭載工事を行なうことができた。

しかし、本艦も明治27年3月20日、強制通風による全力公試運転中に、突然4、5番缶の炉筒が圧壊する事故を生じ、炉筒をフォックス式波型からパープス式に換装準備中開戦を迎えたため、汽缶の改造を中止し応急工事により明治27年6月26日に竣工したが、自然通風で11.05ノットを発揮するに過ぎなかった。軽量大出力を狙った三景艦の高圧缶は製造と取扱の困難さから意外な破綻をもたらしたのである。

開戦までの松島と厳島

明治25年10月内地に到着した松島は、同年12月1日付けで常備艦隊旗艦となり、翌26年6月〜11月、高千穂、千代田などの諸艦を率いて清国、韓国、ロシア沿海州沿岸および北海道方面の

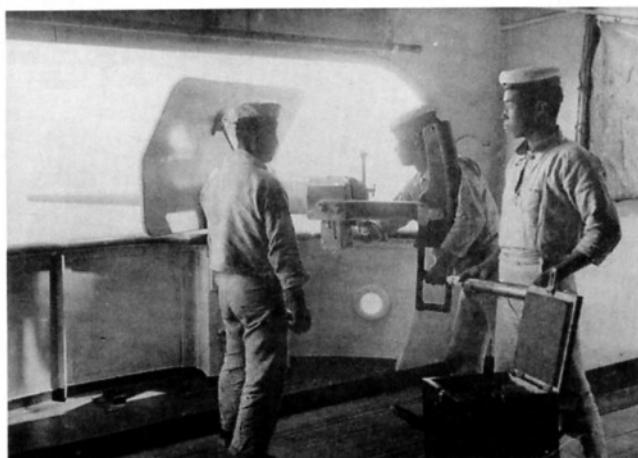
長期巡航と隣邦諸国の歴訪を行なった。この時の航海日数は160日、総航程は7,000里に達したが、本艦は途中、長崎で短期間の汽缶修理を実施しただけで異常なく役務を果たした。この点からも三景艦は脆弱な軍艦でなかったことは確かである。

このような松島の華やかな活動に比べて厳島はあまりにも恵まれなかった。明治25年5月に内地到着後、横須賀で汽缶の改修に専念した同艦は、明治26年6月22日ようやく常備艦隊に編入されたが、清国巡航中の艦隊に合同するため、長崎に向かう途中有明沖で全汽缶に漏洩を生じ、呉で汽缶本体の改造を行なった後、横須賀に帰港した。けれども本艦の汽缶不調はその後も解消せず、明治28年4月、呉造船部で汽缶の煙管の徹底的な改修に着手した直後に開戦を迎え、応急修理の上、艦隊に編入されたが、この時の公試成績は自然通風で12.8ノットに過ぎなかった。

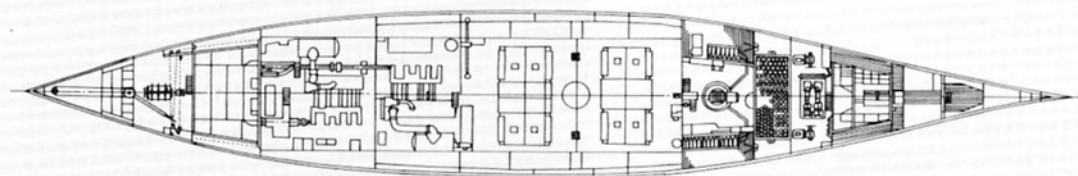
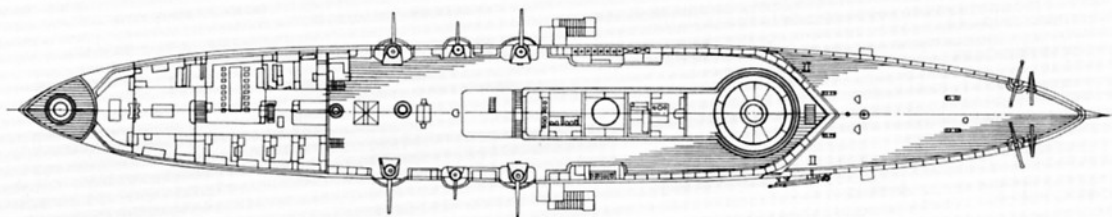
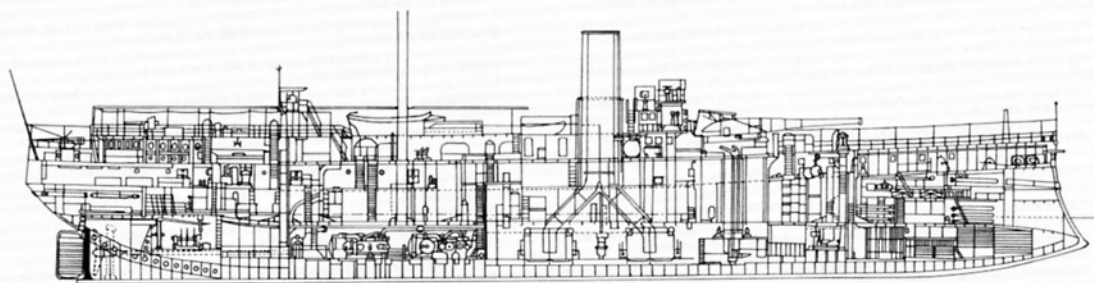
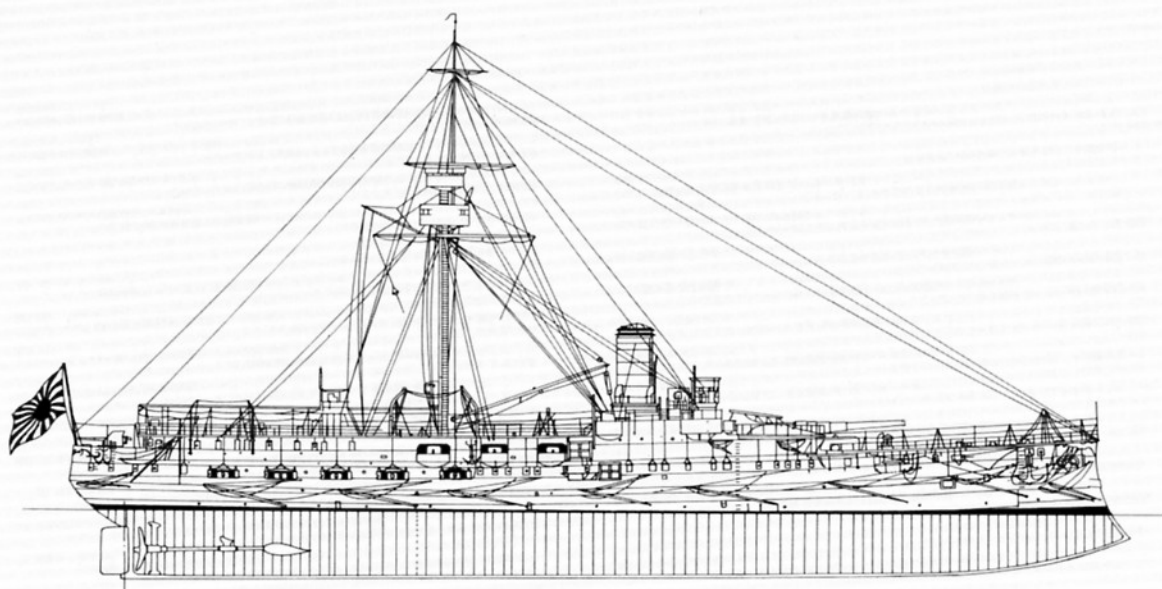
厳島、橋立の速力制限と並んで、もう一つの問題は主砲の射撃訓練にあった。三景艦の主砲は120〜140発程度発射すると初速が変わると考えられていた^{※5}ばかりか、予備砲身を持たなかったので艦隊に編入されていた松島でも連続戦闘射撃を実施せず、まれに実弾射撃を行なっても砲身に強い影響を与える強装薬射撃を避けて弱装薬を使用していたようである。予備艦として過ごす機会の多かった厳島はさらにひどく、内地回航後、明治27年6月までの間に館山沖で試射を1回行なったのみであった。主砲射撃に関する両艦の慣熟度は極めて不完全だったといわねばならない。

開戦当時の三景艦

日清開戦の切迫に伴い、明治27年6月5〜6日、至急工事を完成するよう命令を受けた厳島と橋立は、汽缶修理を応急にとどめて竣工し、7月11〜12日佐世保に入



松島の47ミリ速射砲。



橋立の側面と一般配置

港、伊東祐享長官が座乗する常備艦隊旗艦松島と合同した。この時、初めて三景艦は一堂に会したのである。7月31日、連合艦隊本隊の戦闘序列が松島、千代田、厳島、橋立、筑紫、扶桑に決定されたが、厳島と橋立の実質的な戦闘力、特に汽缶の状態が悪く速力が11~12ノット程度に制限されていることを考えると、これは当然の選択だったであろう。この時の示達には「自由運動ヲ許サレタル時、戦闘規約ニ従ヒ二艦協力シテ運動スル時ハ…」とあるように、陣形が乱れた時は、全力発揮可能な松島と開戦前から常備艦隊で長らく行動をとみにしてきた2番艦千代田を直率しようというのが伊東長官の本心であり、艦隊の先頭に立つ松島の主砲が前方に射撃できないのは二次的な問題だったと推察する。

8月1日の宣戦布告後、連合艦隊は北洋水師に決戦を強要するため、威海衛攻撃に向かった。8月10日朝、同軍港の沖合6,000メートルに迫った厳島の32センチ砲が初めて火を噴いたが、砲台の前方に巨大な水柱が上がったに過ぎず、続く第2弾も近弾に終わった。これが三景艦の最初の主砲射撃だったが、遠距離とはいえ静止目標に対する射撃成績としては決して誇れるものではない。戦前の射撃訓練の不徹底ぶりを裏書きするような結果である。この後、連合艦隊は陸軍部隊の輸送援護に当たり、しばらく決戦は延期された。

黄海海戦とその後の状況

明治27年9月16日、平壤方面に対する陸軍の急進撃に呼応して大同江口近くのチョッペキ岬を出撃した連合艦隊は、翌9月17日増援部隊を護送中の北洋水師と鴨綠江口付近のタール島沖で会敵し、これを撃破した。この海戦の勝因は日本側の快速と速射砲によるものと認識されているが、そのうち三景艦の行動について述べてみたい。

本海戦で三景艦の32センチ砲は合計12発（松島3発、厳島5発、橋立4発）を発射し、少なくとも鎮遠に対し2発の命中を視認しているが、効果は確実でない。明治19年度に計画以来、定遠型の撃破を目標に営々と整備した主力艦としてはあまりにも貧弱な成果といわざるをえない。

海戦後の3艦の艦長報告中、32センチ砲の射撃について、もっとも詳細に記述している厳島の報告によると、主砲を1発発射するごとに、尾栓の開閉困難、撃発機の損傷、水圧系統の漏水などさまざまな故障が発生し、応急修理を行ないつつ射撃している。これは他の2艦でも同様の如くであり、さらに消耗弾薬の内容を照合すると本海戦時、各艦が定遠型の装甲貫徹を期して未經験の強



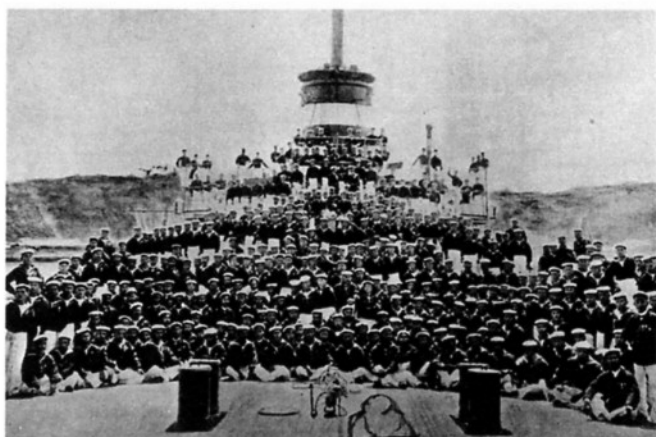
黄海海戦時、被弾により砲身が「く」の字状に変形した松島の12センチ砲。

装薬射撃を実施していたことが分かる。そのため、砲尾などに予期せぬ故障が続発し、これに加えて装填、旋回、照準などの射撃動作の練度不足から発射速度が激減したと推定できる。三景艦の主砲の思わぬ不振は、戦前の連続戦闘射撃訓練の欠如が招いた結果だと考えてよいであろう。

32センチ砲の不成績に反し、海戦の勝利に重要な貢献をしたのが12センチ速射砲である。この海戦でわが艦隊が発射した12センチ砲以上の砲弾3,979発のうち、三景艦の12センチ砲の発射弾数は1,657発で、そのすべてが炸裂威力の大きい鋼鉄榴弾であった。北洋水師の非装甲艦に火の雨のように命中する速射砲の榴弾が、この海戦の勝敗を決したことを考えると、三景艦の副砲を建造途中で速射砲に改正した効果は極めて大きかったというべきであろう。

本海戦中、三景艦は合計32発（うち12センチ砲以上の砲弾13発）の命中弾を受けたが、松島を除き最後まで戦闘能力を維持した。これはベルタンの採用した防御方式の正しさを立証するものだが、次に述べる松島の被弾状況が語るように、北洋水師の発射弾に榴弾が少なかったことに助けられた一面も存在する。

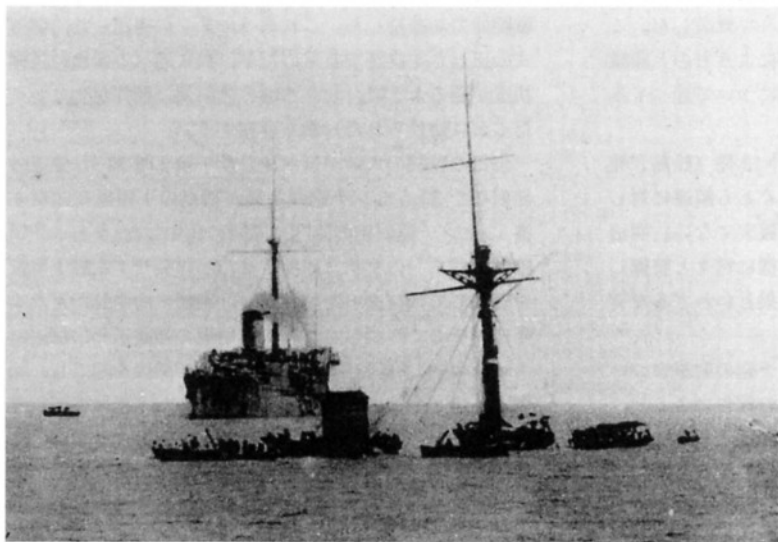
当日の戦闘の大勢がほぼ決した午後3時30分、鎮遠の発射した30.5センチ砲弾2発が松島の下甲板左舷側4番12センチ速射砲の砲門に同時に命中した。うち1発は砲身を「く」の字状に屈曲させたが炸裂せず右舷上甲板を破壊して飛び去った。しかし、砲楯に命中したもう1発は、そこで炸裂したため、同甲板の弾薬送昇口付近にあった12センチ砲用の装薬約60発が誘爆を起こし、死傷100名を生じ前部船体上部を大破した本艦は戦列から脱落した。この大被害の原因は弾薬の供給が速射砲の発射速度に追いつかなかったため、無防御の砲甲板に多量の装薬を集積したことに起因し、鎮遠の重砲弾でなくとも、中口径の榴弾の命中で容易に起こりうる性質のものであった。12センチ速射砲弾薬の供給速度から見て、厳



主缶の換装により長期航海が可能になった三景艦は、明治34年度から練習艦隊を編成し、士官候補生の教育に従事した。写真は明治36年度遠航時、橋立艦上での記念スナップ。

島、橋立も同様の状態にあったものと推定され、もし北洋水師が充分な速射砲と榴弾を装備していたならば、わが艦隊は手痛い打撃を被っていたであろう。

黄海海戦で大破した松島は、いったん内地に帰投し呉造船部で修理の後、11月13日常備艦隊旗艦に復帰し、厳島、橋立とともに旅順および威海衛の攻略に参加した。海戦後、戦意を喪失した北洋水師は出撃を避けたので三景艦の主砲はもっぱら陸上砲撃に使用されたが、黄海海戦の苦い教訓に鑑み強装薬射撃を断念したようで、松島の記録によると使用したのはすべて弱装薬であり、砲の故障は発生しなかったようである。また発射速度が同海戦時の約1時間/発から11分/発に向上しているのも注目値する。



明治41年4月30日、コロンボ、バタビア方面遠航の帰途、馬公に入港中の松島は火薬庫の爆発事故により沈没し、同港内で着底した(手前)。遠方は厳島。

威海衛占領後、三景艦は明治28年3～4月、澎湖島攻略作戦に従事したが、3月23日同島洪北砲台に対する砲撃では三景艦合計10発の主砲射撃に際して砲機の故障がまったく発生せず、実戦を通じて砲の取扱いが著しく進歩したことを示している。このようにして三景艦は日清戦争中、主力艦としての任務をまっとうし、海上戦闘を勝利に導いたのである。

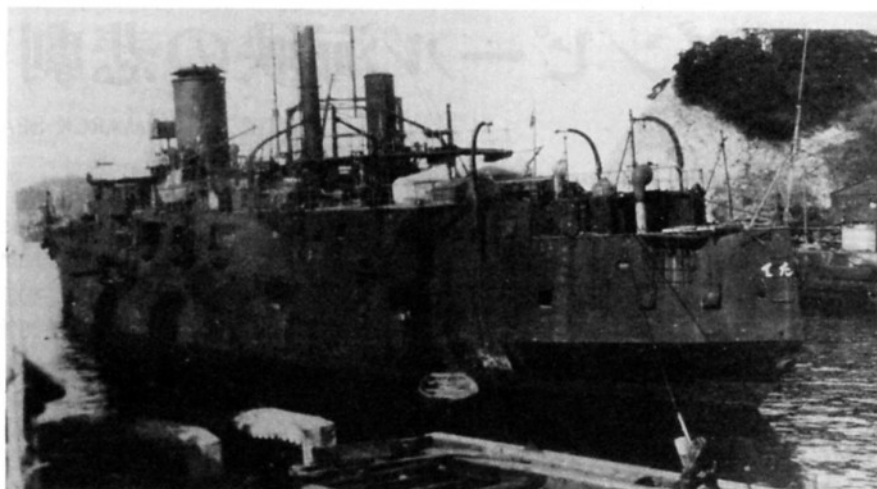
日露戦争終結までの三景艦

日清戦争後のわが海軍は明治30年12月、新戦艦富士、八島の艦隊編入によって著しい変革を遂げ、第二線的存在となった三景艦は、明治31年3月21日付けで二等巡洋艦に類別された。本艦型の円缶の故障は戦後も続発していたが、明治34～35年ベルヴィール式水管缶(橋立は宮

原式水管缶)8基に換装後、汽缶の信頼性を増し、長期航海が可能になったので、明治34年度から練習艦隊を編成し、士官候補生の育成に従事した。この頃、旧式化した日清戦争時代の艦艇の近代化に当たって、発射速度の遅い大口径砲を中口径速射砲に換装する傾向が強かったが、三景艦の主砲はそのまま残置された。六六艦隊の新戦艦と比較しても、本艦型の32センチ砲はなお有力であり、来たるべき対露戦に備えて撤去が惜しまれたためであろう。

明治36年12月28日、日露戦争を前に再び連合艦隊が編成された時、三景艦はかつてライバルだった鎮遠とともに第3艦隊に編入され、旅順攻略戦の監視と後方支援に当たり、8月10日の黄海海戦では、12センチ砲破損のため戦列を離れていた厳島を除く2隻が戦闘に参加した。翌明治38年5月27日の日本海海戦時、夕刻の戦闘に参入した三景艦は、舵故障を起こして列外に出た松島を除いて敗残のロシア艦隊に迫り、波浪の高い洋上でボロディノ Borodino 級戦艦と工作艦カムチャツカ Kamchatka に対し主砲と副砲による射撃を加え命中を確認している。当日の昼間砲戦と、それに続く夜戦で大打撃を受けたロシア艦隊は、その後いったん接触を絶ったが、翌朝三景艦を主力とする第5戦隊が竹島南方を北東に向かう敵残存艦隊を発見し、主力部隊の到着まで触接と監視に当たり、その逃走を挫折させた。老朽のた

大正14年、雑役船として使用中の橋立。本艦は同年12月25日付けで除籍され、翌年5月1日に売却後、横須賀で解体された。



め、偵察巡洋艦としてはすでに劣速の部類に属していた三景艦の索敵行動が、同海戦の完全勝利の布石となったことは記憶されるべきであろう。

日露戦争後の三景艦とその終焉

日露戦争後の三景艦は明治39年度から再び練習艦隊を編成したが、明治41年、コロンボ、パタヴィア方面に遠洋航海の帰途、馬公に入港中、4月30日午前4時9分、松島が火薬庫の爆発事故を起こして沈没し、乗員460名のうち224名が犠牲になった。事故の原因は現在も明確でないが、32センチ砲火薬庫に隣合った給与室内で何らかの原因により火災が発生し、火薬庫内の装薬が爆発したものと見られる。爆沈した松島の船体は大破屈曲していたため、再使用を断念して同年7月31日に除籍後解体されたが、乗艦中の第35期少尉候補生33名の遭難はかけがえのない損失であった。

この事故の翌年から残った厳島と橋立は練習艦隊の任務を阿蘇と宗谷に譲り、大正元年8月28日、二等海防艦に類別を変更した。竣工当時に称せられた海防艦と異なり、この時代海防艦は第一線の役務に耐えない老朽艦を意味し、橋立が大正4年度大演習の赤軍第3艦隊に編入されたのを最後として、以後、両艦とも艦隊役務につくことなく所属鎮守府の練習艦として余生を送った。

厳島は大正8年4月1日雑役船(潜水艇母船)厳島丸となり、さらに大正9年7月1日特務艇(潜水艇母艇)に転籍して艦名を厳島に復した後、大正13年7月まで呉の潜水学校の浮校舎として使用の上、大正14年4月14日廃船になった。これに先立ち、地元有志から本艦を厳島神社の記念艦として永久保存したい旨の申し出があったが実現せず、大正14年10月、飯野商事に約14万円で売却された本艦の船体は、大正14年10月から15年7月にかけて呉の吉浦で解体された。

一方、橋立は大正11年4月1日、雑役船橋立になった後も横須賀海兵団の練習船として使用されていたが、大正14年12月25日付けで廃船になり、翌大正15年5月1日に売却後、横須賀で解体された。

* * *

明治24年に1番艦厳島が竣工以来、大正15年に厳島と橋立が解体されるまで、三景艦は35年間にわたって興隆期のわが海軍を支えたが、その存在価値はなにを置いても清国の定遠型装甲艦の撃破にあり、具体的には日清戦争時の黄海海戦の活躍に集約される。この戦闘は三景艦が計画時に想定したとおりの理想的な場面だったが、主砲の運用に慣熟していなかったため、好機を逸してしまった。本艦型にかけた海軍の期待は空しかったと評価すべきであろう。

三景艦は想定敵国の主力艦を凌駕する大口径砲を搭載し、その砲力が来たるべき海上戦闘の勝敗を決定するものとして期待された点では第2次大戦での大和型戦艦と共通し、しかも、その巨砲の威力を十分に発揮できなかったことも類似している。しかし、その原因は基本計画の適否ではなく、ヨーロッパの先端技術を未消化のまま、受け入れざるをえなかった明治初期の日本の立場に起因するところが大きい。外国の兵器を購入し、これを使いこなすのが、いかに困難だったか。軍事技術の自立が、軍艦の建造のみならず、その運用にいかに重大な影響を及ぼすかを三景艦の生涯は立証していると思うのである。

注1. 実際の建造費は厳島2,478,985円、松島2,453,179円、橋立2,559,609円だった。2. 送風機により空気を強制的に缶室に送入し燃焼効率を高める方式。これに対し従来どおり自然燃焼させる方式を自然通風と称した。3. 明治20年1月10日付けのベルタンの口述(板井少技監訳および校閲)による。4. これは煙管と管板の間に細い銅線を2本嵌合し、熱変化時にこの部分が煙管や管板と異なった収縮または膨張するのを利用して漏洩を防止する方法で、後に厳島にも装設された。5. 竹内重利中将の回想では60発が命数と考えられていたともいわれる。